

創年の社会参画を前提とした学習機会の提供事業に関する一考察Ⅱ

—平成17年度「まつど生涯学習大学専攻科」の研究結果を踏まえて

清水 英男

はじめに

平成17年度には、「創年の社会参画を前提とした学習機会の提供事業に関する一考察—まつど生涯学習大学専攻科を中心として」と題した研究(以下、「前回の研究」という。)を行い、聖徳大学生涯学習研究所紀要第4号に発表した。

本研究は、前回の研究で提言した「地域参画型学習機会の提供事業のあり方」を踏まえて実践した「平成18年度まつど生涯学習大学専攻科(以下「専攻科」という。)」を事例研究の対象とした。そして、この専攻科の受講生(以下「受講生」という。)の学習・研究プログラム(以下「学習プログラム」という。)に関する捉え方と受講生自らが行っている学習・研究活動(以下「活動」という。)の現状と課題などを調査した。その調査結果を分析することなどを通して、受講生が学習の成果を活用して地域活動に参画することを前提とした学習プログラムの在り方を明らかにすることを目的とした。

ここでいう創年とは、前回の研究同様「NPO法人全国生涯学習まちづくり協会が提唱している『地域のために自らの力を発揮し、創造的に生きる大人(中高年者)の新しい呼称』」とした。

なお、松戸市をはじめ、まつど生涯学習大学や専攻科などの概要については、前回の研究(「聖徳大学生涯学習研究所紀要第4号」pp.9-11)を参照されたい。

1 平成18年度専攻科の学習プログラムの概要

今回の学習プログラムは、前回の研究の成果を踏まえて編成した。その概要は、以下のとおりである。

(1)開設趣旨

自分たちの“まち”を自らの手でつくり育てるという理念を実現するために必要な学習・研究活動を行い、その学習で得た成果を“まち”づくりに活用できる実践力を培う。

(2)対象者及び定員

まつど生涯学習大学修了者30名

(3)メインテーマ

まつどのよさを楽しむ“まち”づくりの研究

(4)研究内容

その内容は、松戸市民が誇りにできるものを発見し磨き上げるとともに、多くの市民が「気づき 学び いくつしむ」ことを支援できる方策を研究することとした。

(5)学習プログラム

1年間17回(1回は10時～12時の2時間)を原則とし、次のような学習プログラムとした。

回	月 日	内 容
1	5月31日	開校式・オリエンテーション 基調講演「生涯学習による“まち”づくりを考える」
2	6月7日	全体会(講義)「“まち”づくりを楽しむ方法(生涯学習ボランティアの活動)」
3	6月14日	全体会(仲間づくり①)「私と地域自慢(自己紹介、仮班編成)」
4	6月21日	全体会(仲間づくり②)「ワークショップのすすめ方」
5	6月28日	全体会(講義)「グループ活動に必要な機能とリーダーシップ」
6	7月5日	全体会(演習①)「仮研究テーマの設定Ⅰ(仮班での話し合い)」
7	7月12日	全体会(演習②)「仮研究テーマの設定Ⅱ(仮班での話し合い、決定)」
8	7月19日	班研究活動①(現地調査①)「仮研究テーマの検証」
9	7月26日	全体会(演習③)「演習のまとめ(各班のまとめの発表)・編編成の決定」
10	9月6日	班研究活動②(演習④)「学習プログラムの作成(ブレインストーミング)」
11	9月13日	班研究活動③(現地調査②)「【班別テーマによる活動】」
12	9月27日	班研究活動④(現地調査③)「【班別テーマによる活動】」
13	10月11日	班研究活動⑤(現地調査④)「【班別テーマによる活動】」

		る活動】
14	10月25日	班研究活動⑥(現地調査⑤)「【班別テーマによる活動】」
15	11月8日	班研究活動⑦(現地調査⑥)「【班別テーマによる活動】」
16	12月20日	班研究活動⑧(研究成果のまとめ)「班別研究レポートの作成、発表準備」
17	1月31日	全体会(研究成果の発表)「各班の発表、講評、レポートの提出」

注1) 現地調査は、標準回数を例示している。各班の必要に応じて増減できる。

注2) 第3回の班への所属は、仮の編成とする。各班のテーマが決定された後(9回目)に、再度班を選択して所属班を決定する。

注3) 班別研究活動の講師・助言者は、各班の研究・学習内容に即して決定する。

注4) 各班に班長、副班長(各1名)を置く。班長は、班を運営する。また、必要に応じて公民館(主催者)と運営等について協議を行う。

2 平成18年度専攻科学習プログラム編成上の視点

平成18年度の学習プログラムは、前回の研究における提言「地域参画型学習機会の提供事業のあり方」を参考にして編成した。その詳細については、聖徳大学生涯学習研究所紀要第4号(pp.23-25)を参照されたい。

具体的には、これらの提言の中から、以下の視点を重視した。

(1) 呼吸する学習プログラムの導入

平成18年度の学習プログラムの班別による学習プログラムは、平成17年度の専攻科同様「呼吸する学習プログラム」を導入した。

この呼吸するプログラムは、班別活動が進展する中で、受講生の興味・関心の度合いや探求する程度が深化したり研究テーマの方向が転換したりするたびに、内容・方法などを改変し展開できるという特性を有している。つまり、受講生本位で学習の進捗状況に応じた再編成が可能という柔軟性を持った学習プログラムといえよう。

(2) 単年度3学期制の学習プログラムの編成

平成18年度の学習プログラムの開催期間は、単年度とした。また、学習プログラムは、1回2時間で17回(班別活動の8回を含む。)開催することとした。そして、年度の早い時期から開設し、1年間を次のように3学期に分け完結することにした。

第1学期(第1回から第7回まで)は、全員共通に学ぶ基本的な内容を重視した。また、班ごとに研究テーマを容易に

設定できるような配慮を行った。具体的には、まず、受講生が学習し体得すると班別活動に効果をあげるような内容・方法を盛り込んだ。また、仮の班を編成し班別仮研究テーマを容易に設定できるよう、地域自慢などの発表や現地調査での確認などに十分な時間をかけた。さらに、これら仮研究テーマを全体会で協議し正式な班の研究テーマとした。当然ながら、これらの研究テーマ以外の研究を望む受講生には、改めて研究テーマの発表の機会を提供した。その後、各受講生が自らの意思でテーマを決定し参画できるよう班を再編成したのである。

第2学期(10回から14回まで)は、班別活動による研究を中心とし、各班の班員が満足できるよう班毎に現地調査や研究の時間を設定できる「呼吸するプログラム」とした。つまり、学習回数の増加や時間の延長、講師の選定など班員の学習意欲や班活動の進捗状況に応じたプログラムを作成できるようにしたのである。

第3学期(15回から17回まで)は、班別活動での学習と研究の成果をまとめて全体会などで発表し、これらの成果を全員が共有できるように配慮した。また、これら学習と研究の成果を広く伝えることを目的とし「まつど生涯学習大学」で発表を行うこととした。さらに、この学期は、今後の学習・研究活動をすすめる意欲を高めることが大切となる。そこで、これからの活動を“無理なく、気軽に、できることから”すすめるという視点をもって、仲間と楽しく学ぶ機運を醸成することに留意することとした。

ア 班活動のヒントを提供する第1学期の共通学習

受講生全員が共通に学習する内容・方法は、専攻科の趣旨の理解を深めることに重点をおいた。また、無理なく班別のテーマを設定し、気軽に班別活動に参画するための基本的な理論と技法を身につけることを狙いとした。つまり、生涯学習による“まち”づくりの理論や事例をはじめ、グループ・ダイナミクスやリーダーシップ、集団の維持機能や目的達成機能などを体験的に学習できる内容と方法を多くしたのである。さらに、受講生の班活動に役立つ実学を心がけた。

具体的には、第1回での「生涯学習による“まち”づくりを考える」を3時間とした。また第2回と第3回の全体会「仲間づくり(「地域自慢」と「ワークショップのすすめ方」)」では、グループワークの理論と手順を約1時間程度説明し、演習に時間をかけて(約2時間)フィードバックを十分に行えるようにした。さらに、新たに「グループ活動に必要な機能とリーダーシップ」を設け、集団の維持機能や目的達成機能などの体験的な学習の機会を約2時間実施した。

イ 班員の長所を生かした第2学期の班別活動

班別による学習・研究テーマの設定と班活動の学習プログラム作成には、十分な時間を充当することにした。特に、仮班ごとのテーマの設定は、各班ともに全班員が納得して決定するという合意法で実施した。

学習方法としては、現地におもむき講師を交えての体験学習(現地調査)を6回にわたり設定した。また、各班が必要に応じて回数を増やすことを奨励した。講師については、公民館の協力を得て適任者に依頼できるようにした。さらに、班活動を効果的に行うため、全班員が自らの長所を生かせる役割を担当し責任を持って遂行できるよう配慮する必要性を強調した。

ウ 地域活動への参画に配慮した第3学期の内容・方法

今回の専攻科の学習プログラムも、受講生が専攻科終了後自主グループ結成へスムーズに移行できることを期待して編成されている。

前回の研究における自主グループづくりを阻んだ要因は、「班活動が研究成果をあげる(目的達成機能)ことを優先しすぎ、仲間づくり(集団の維持機能)にあまり力を入れなかった。」ことや「役員の負担が多すぎた。」ことなどがあげられていた。

そこで、今回は、班員が積極的に班活動に参画し班役員の負担を軽減することに心がけるように配慮した。また、班別活動は気軽に容易に実践できるような内容と方法にするよう働きかけた。さらに、各班で昼食会や散策会など懇親の機会やレクリエーション活動などを取り入れることを奨励した。そして、各班が研究活動で得た成果を全員が共有できるよう、全体会での発表会を行うこととした。

なお、平成16・17年度の専攻科で編成された3班の中で、終了後に自主グループが一つできた。その班は、「街路樹ルネッサンス」である。そして平成18年度からは、3グループに分かれ、定点観測を続けながら、新たな課題や取り組みを学習・研究し続けている。

(3) 受講生が納得できる班編成

受講生が自主的に学習・研究する班別活動を充実するための班編成は、できる範囲で班を多くし、受講生が班ごとの学習・研究テーマを選択できる機会を増やすこととした。また、受講生が希望するテーマの班に参画できるよう、班選定の機会を繰り返し提供した。さらに、班活動を統括する班長と副班長を置き、それら役員のもとで全班員が役割を果たす組織を編成することとした。

その結果、仮の班として編成した三つの班だけが正式な

班となった。また、すべての受講生が仮の班に所属したまま、その班が正式な班となり受講生が班員となった。このことは、前回の調査から少なくとも5班程度が編成されると予測していたが、意外な結果となった。しかし、この班編成の過程に時間をかけたので、班活動での欠席も少ないなど班員として満足しているように見受けられた。

3 班別学習プログラムによる活動の取組状況

平成18年度の学習プログラムでの班編成は、3班となった。各班の研究テーマ、班員数、取組状況は次のとおりである。

(1) 第1班の取組状況

第1班は、8名の班員で「お寺お宮のファンタジーさーしーあんな話、こんな話」を研究テーマとした。また、研究の目的を「松戸市内にある神社仏閣にまつわる民話、民芸の研究」とし、9月6日から11月8日の中間発表までには、既に7回の現地調査を行っていた。

この時点で、「神社仏閣の民話や民芸について新たに掘り起こす限界を認識し、新興住宅地の自治会がつくった八ヶ崎天満宮を研究の対象とした。」という、まさに、呼吸する学習プログラムとなっていた。

(2) 第2班の取組状況

第2班は、7名の班員で研究に取り組んでいる。7月26日に最初に作成した班別学習プログラムの研究テーマでは「障害者のための散歩道」とし、その目的を「バリアフリーの学習とともに、障害者が散歩するための一助となるべく、松戸市内の駅を拠点として目標までのバリアフリーを調査し、モデルコースを設定紹介する。」とした。

しかし、8月2日の「バリアフリーの体験」をはじめ、現地調査などから、再度研究テーマや目的などを検討した。その結果、研究テーマを新たに「車椅子との散歩」とし、その目的を「バリアフリーについて学習するとともに、車椅子と一緒に散歩できる代表的なコースを紹介すべく、松戸市内の駅を拠点とした目的地までを調査する。」と改めた。そして、「市役所などに改善の要求をすることではなく、そのままの現状をどのように活用するか、どのような道を通るかを協議し、最適なコースを設定する。」こととしたのである。なお、9月6日から11月8日の中間発表までには、既に8回の現地調査を行っていた。まさに、呼吸する学習プログラムとなっていた。

(3)第3班の取組状況

第3班は、班名を「水戸道中膝栗毛」とした。班員は7名である。研究テーマは「旧水戸街道を中心とした松戸の変遷、名所、史跡巡り」と定め「住んでいるまち『松戸市』を知り、故郷愛づくりの学習を行う。」ことを目的とし、9月6日から本格的な班別活動を開始した。

11月8日(水)の中間発表時には、既に5回の現地調査を行っている。この間、郷土の歴史について専門家を講師として学習を深めている。また、松戸駅周辺だけではなく、新たに小金井駅周辺を加えた名所めぐりマップを各2コース(計4コース)作成することとした。さらに、これらの解説編を作成することとし編集を始めている。まさに、呼吸する学習プログラムとなっていた。

(4)研究成果と活用

平成18年11月27日現在(以下「現時点」という。)における平成18年度の研究成果は、二つほど考えられる。その一つは、集団による望ましい学習・研究活動を実践しているということである。具体的には、11月8日に「全体会(各班の研究成果の発表、質疑応答、全員協議)」での発表をはじめ、受講生と班長を対象とした調査結果から、各班とも班役員の的確なリーダーシップのもとで、全班員が意欲的に研究活動に取り組んでいることがわかった。また、研修テーマに対する優れた知識やパソコン・写真などの技術を有する班員が積極的にかかわっていることがわかった。さらに、昼食会などを実施し好ましい人間関係づくりを行っていることもわかった。二つ目は、各班とも「まつど再発見」にふさわしい学習・研究活動を行い、その成果をまとめているということである。

これら各班の研究成果の活用については、平成19年11月31日に「全体会(各班の研究成果の最終発表、講評)」を、また、平成19年1月25日に「まつど生涯学習大学」での発表などを予定している。さらに、これらの研究の成果をまとめた報告書を作成、広く活用されることを期待している。

4 受講生と班役員を対象とした意識・行動調査の概要

本調査は、創年の地域活動を促進する学習機会の提供事業のあり方を明らかにするための参考資料を得ることにある。

そのため、前回の研究の成果を踏まえて作成した学習プログラムの検証を通して、専攻科の学習・研究内容・方法や班活動にかかわる「呼吸する学習プログラム」などの改善に資することを狙いとした。

(1)受講生の意識・行動調査の概要

この調査は、受講生の学習プログラムに対する評価やボランティア活動などに対する意識・行動を明らかにすることを目的とした。その概要は、以下のとおりである。

- ①調査の対象(抽出方法)：専攻科の受講生22名(悉皆)
- ②調査の実施方法：集合調査(アンケート調査)
- ③回収結果(回収率)：16名(72.7%)
- ④調査実施日：平成18年11月8日(水)
- ⑤調査内容：別添資料1「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査集計票」のとおり。

(2)班長の感想・提言調査の概要

本調査の目的は、平成18年度の学習プログラムが班別活動に与える影響と班別活動における受講生の変容を明らかにすることである。そのため、各班の班長を調査対象として、各班の集団維持機能や目的達成機能などの状況や課題、提言などについて記述式と聞き取り調査で回答を得た。

- ①調査の対象(抽出方法)：専攻科の班長3名
- ②調査の実施方法：集合調査(アンケート及び聞き取り調査)
- ③回収結果(回収率)：アンケート調査及び第1回聞き取り調査(班長会議)は3名(100.0%)、第2回目の聞き取り調査(班長会議)は2名(66.7%)
- ④調査実施日：平成18年10月30日(月)
- ⑤調査内容：別添資料2「平成18年度まつど生涯学習大学専攻科『まつどのよさを楽しむ“まち”作りの研究』班長の感想・提言調査」のとおり。

5 調査結果の概要

(1)受講生の意識・行動調査結果の概要

ア 属性

今回実施したすべての調査の対象者は、60歳以上の市民が受講できる「まつど生涯学習大学」を終了して平成18年度の専攻科で学んでいる受講生である。

今回の専攻科の受講生の性別は、全受講生22名のうち女性性は5名であり、男性が17名(77.3%)と圧倒的に多数を占めていた。調査の回答者は、男性12名(75.0%)であり、女性性は4名(25.0%)であった。

年齢は、60歳から70歳未満が11名(68.7%)、70歳以上が5名(31.3%)であった。また、職業については、約9割が無職であり、約1割が仕事をしている。

イ 専攻科の受講者募集の周知方法と受講動機

前回の調査(平成16年10月27日実施、全回答者24名を

100%とした。)によると、受講者募集を知った受講者の約8割は、市の広報誌(66.7%)と公民館の広報紙(12.5%)と答えている。また、受講動機は、「自分の意思で参加」が87.5%であった。

今回の調査では、回答者16名中15名(93.8%)が「市の広報誌」であり、残り1名(6.2%)が「公民館の広報紙」と答えている。また、受講の動機は、全員が「自分の意思」で参加している。

これらのことから、受講生は、広報で情報を得て自らの意思で受講した地域活動に対する積極的な参画意識を持った学習者といえる。

ウ 地域活動への参画の状況と参画意欲

ボランティア活動やグループ活動など地域活動への参画状況については、受講生の81.2%[現在行っている(62.4%)、過去に行ったことがある(12.5%)、その他(6.3%)を含む。]が参画した経験があり、18.8%が「経験がない」と答えている。

今回の受講生は、昨年の受講生(参加経験が45.9%)に比べると参画経験者が多いといえる。

また、参画している活動内容は、福祉、学習、町内会の役員などであった。また、3名(18.8%)が「経験していない」と答えている。その理由は、「活動の内容がわからなかった2名」と「忙しかったから」が1名であった。

「今後地域活動に参画したい」と回答した受講生は、15名(93.1%)[ぜひ参画したい(37.5%)、機会があれば参画したい(56.3%)を含む。]であった。

つまり、今回の受講生の約8割が地域活動の経験を有し、約9割強が今後とも参画する意欲を持っていることがわかった。

エ 参画したい地域活動(複数回答)

今回の調査で参画したい地域活動の第1位は「環境保全に関する活動(43.6%)」であり、第2位は「公共施設に関する活動(37.5%)」であった。第3位(31.3%)は、「社会福祉に関する活動」と「体育・スポーツ・文化に関する活動」であった。

今回の調査結果は、前回の2カ年間実施した専攻科の最後の調査となった第3回調査(平成17年10月26日、回答者15名)結果との共通点がみられた。つまり、第1位は、「環境保全に関する活動」の61.5%であった。第2位が「社会福祉に関する活動(38.5%)」、第3位が「体育・スポーツ・文化に関する活動」、「青少年の健全育成」、「市民の学習支援」の23.1%であった。

このことから、今回の受講生は、地域活動に関する現状を的確に認識し自らの適性にあった参画を求めているといえよう。

オ 専攻科で学習活動を継続している理由

今回の調査では、第1位が「自分の可能性を探るため(37.5%)」であった。第2位が「教養を高めるため(25.0%)」、第3位(18.8%)が「地域社会に役立つ活動を行うため」と「趣味を充実するため」であった。

前回の第1回調査の時点で継続して学習している理由の第1位は、「地域社会に役立つ活動を行うため(45.7%)」であり、第2位は「自分の可能性を高めるため(25.0%)」であった。

このことから、今回の受講生が学習を継続している理由は、「専攻科での学習が自分の可能性を高めること」といえよう。また、前回より「地域社会に役立つ活動のため」と考えている受講生が少ないことがわかった。

カ 専攻科の学習内容・方法の有効度(複数回答)

今回の調査では、15名(93.7%)が「専攻科の学習が役に立っている」[非常に役に立っている(24.0%)、ある程度役に立っている(68.7%)を含む。]と回答している。このことは、前回の第2回調査でも94.7%であった。

また、役に立った学習として、第1位が「集団での意思決定の技法(56.3%)」であり、第2位は「生涯学習の理論」と「班による課題発見・解決型の学習」であり、いずれも37.5%であった。第4位が「グループ活動の理論とリーダーシップ(31.3%)」であった。

このことから、班別活動に対応できる学習内容・方法や技法が役立っていることが理解できた。

なお、「役立っていない」、「専攻科の学習に関する問題点や改善点」という項目に回答した受講生はいなかった。

(2) 班長の感想・提言調査結果の概要

今回の専攻科は、受講生全員が対等な関係で学習や研究活動に参画することを原則とした。しかし、前回の研究の成果として「編活動を円滑に行うためには、班を掌握し班の責任者となる班長や副班長を置いたほうがよい」という提言に従い、班長と副班長を班員が決定した。なお、班別活動を効果的にすすめるために必要な司会係、発表係、記録係などの設置は、各班の裁量とした。

これら各班の班長を対象とした調査結果からは、班編成上の問題点や班の結成から活動期にかけての集団維持機能や目的達成機能の状況や役員のかかわり方などについて貴

重な意見や提言などを得ることができた。

これらの意見・提言を集約すると以下のようなことが言えよう。

なお、調査期間を次のように区分した。

①初期：平成18年5月31日から7月21日の計9回

②中期：平成18年9月6日から10月25日の計5回

③後期：平成18年9月14日から11月8日の計5回

ア 専攻科の学習内容・方法の有効度(複数回答)

今回の調査では、是認が「専攻科の学習が役に立っている」[非常に役に立っている(2名)、ある程度役立っている(1名)を含む。]と回答している。このことは、受講生の15名(93.7%)が同様の回答をしている。

また、役に立った学習として、第1位が「生涯学習の理論(3名)」であり、第2位が「集団での意思決定の技法(2名)」と「グループ活動の理論とリーダーシップ(2名)」であり、以下は各項目に1名が回答していた。

このことから、班長も受講生同様班別活動に対応できる幅広い学習内容・方法や技法が役立っていることが理解できた。

なお、「役立っていない」という項目に回答した班長はいなかった。

イ 班員の人間関係づくりについて

人間関係については、初期では一つの班には協調性があり協力的な班員が多く取り組みやすい状況にあった。しかし、二つの班が班員の相互理解学習プログラム十分でないことや価値観などの違いなどにより遠慮がちで消極的な傾向にあった。

中期になると、三つの班ともに、班活動の目的意識が明確になり現地調査や昼食会などを行うにしたがって、相互に理解も深まり協調的な関係の中で積極的に発言するなど課題達成の意欲も高まってきている。しかし、欠席する受講生もいるようになった。後期では、気配りの必要もないほど纏まり良い人間関係がつけられた。仲間という関係づくりができてきている。

役員が、好ましい人間関係づくりをすすめるにあたって問題と考えたことは以下のようなことであった。

まず、前期では、「協議や現地調査に理由なく参画しない班員がいた」とことや「テーマなどの協議で、否定的な発言ばかりする班員や自分の提案以外は賛同しない班員がいた」ことなどであった。中期では、「現地調査などの集団行動でも意欲に欠け緩慢な班員がいた」ことなどである。後期では、「まとめのレポートを特定の班員に任せようとし

た班員がいたが、他の班員が全員で参画するべきであると発言し撤回させた」ことなどであった。

これらのことから、編別活動がすすむにしたがって好ましい集団がつけられていることがわかった。

次に、役員が、班の好ましい人間関係づくりとして力を入れた主なことは、以下のようであった。

前期では、「班員が好ましい人間関係をつくり、全員に発言させ、研究のテーマをまとめる努力を行った。」ことや「早く名前を覚えるよう顔写真入りの名簿を作成した」、「班結成早々食事会を実施しコミュニケーションを深めた」ことなどであった。また、中期は、「関係する学習・研究テーマを共通理解し気軽に意見交換ができるようコミュニケーションづくりに力を入れた」とことや「各回で当番制のようにして全員が役割を果たすように配慮した」、「調査先の担当者や会計など役割の分担に努めた」ことなどである。後期では、「全班員に発言させるなど参画意識をもたせた」とことや「全員が分担し研究結果をまとめることを通して、その成果を全班員が共有できるようにした」ことなどであった。

このことから、班長の対応によって、班の人間関係が左右されることが理解できた。また、今回の班長の努力が、好ましい人間関係づくりに役立っていることがわかった。

ウ 班の目的達成について

前期では、一つの班が「研究テーマもすぐ決まり、全員が熱心に早く取り組んだ。また、調査も拡大した」ということであった。二つの班は「テーマの設定ができない。また、全員共通のイメージがもてない」という状況であった。

次に、中期では、各班とも「議論を重ねていくうちに研究テーマが決定するなど方向が見えてきたので班員がまとまってきて、協力しあい現地調査に取り組んでいる」ということなどであった。

続いて、後期では、全般的に「各班員が責任をもって協議を行い調査範囲が拡大したり調査内容を変更したりした。」ことや「班員が積極的に現地調査を行うなど役割を果たし、効果的な取り組みができるようになった。」という状況になった。

このことから、班別による目的達成活動も、編別活動がすすむにしたがって好ましい状況がつけられていることがわかった。

エ 専攻科終了後のグループ結成の可能性について

専攻科終了後のグループ結成については、「期待できる」と「わからない」と「無回答」が各1名となった。

その中で「わからない」とした理由は、「班員が自主的に研究調査を行うとは思っていなかったように見受けられるので、現段階では自主グループとして活動できるとは思えない。但し、最終結果がでていないので方向はわかっている」とのことであった。

今回の調査は、平成18年10月30日現在のものである。学習プログラムは、正式なものでもまだ4回残っている。各班は、最後の調査とまとめに4回以上の回数と時間をかける予定である。したがって、この質問は、専攻科終了直前に再度行うこととしている。

6 地域参画型学習機会の提供事業のあり方

ここでは、前回の研究での改善点を取り入れた専攻科の学習プログラムに対する受講生や班長の評価や意識・行動調査結果をはじめ、公民館職員や受講生からの普段の聞き取り調査などを考察し、今後の地域参画型学習機会の提供事業の在り方について提言を試みた。したがって、この提言の一部は、仮説段階にある。つまり、専攻科の全プログラムが終了しないなかでの提言ということである。

(1) 学習プログラムの単年度化と3学期制の導入

今回の開催期間は単年度とし、1回2時間で17回(班別活動の8回を含む。)開催した。そして、年度の早い時期(5月31日)からスタートし、一年間を3期に分けたのである。第1学期は、すべての受講生が共通した学習活動を実施した。第2学期は班別活動のテーマ設定に時間をかけ、班毎に体験学習を実施することを中心とした。第3学期は、学習と研究の成果をまとめることと、それらの成果をすべての受講生が共有することに力点を置いた。特に、班別活動の学習プログラム(自主的班活動を含む。)は、呼吸するプログラムとした。

これらのことについて、今回の調査結果では、受講生や班長は高い評価を与えている。したがって、このレイ・アウトを原則とした学習プログラムは効果を挙げたといえよう。しかし、班別活動については、各班とも指定された回数や時間数を上回って実施していることから、回数は8回以上とすることが必要である。

なお、現時点における専攻科終了後の自主グループの結成については、消極的であった。

今後は、自主グループ結成を前提とした学習内容などを盛り込むことの研究をはじめ、専攻科終了後に各班の自主的なグループ活動を支援する研修や成果の発表の機会を提供する必要性の研究が課題といえる

(2) 班別活動を効果的にする共通学習の内容・方法

前回の研究の課題を踏まえ、今回の受講生全員が共通に学習する内容・方法は、グループ・ダイナミックスやリーダーシップ、集団の維持機能や目的達成機能などを体験的に学習できる時間を多くした。

具体的には、第1学期では、第1回での「生涯学習による“まち”づくりを考える」と第2回の「“まち”を楽しむ方法」をセットにした。そして、第3回から第9回までを班活動を中心に班ごとの研究テーマを設定した。その中で、グループワークの理論と手順や演習に時間をかけた。また、フィードバックを十分に行えるように配慮した。さらに、集団の維持機能や目的達成機能などを体験的に学習できる場を設定した。

これらのことについては、今回の調査結果からみると、受講生や班長は高い評価を与えている。したがって、この学習プログラムを原則とし、理論と演習を融合した方法での学習活動は効果的といえよう。

第3学期には、受講生全員が一堂に会し情報交換を行いながら各班の研究のまとめと発表を行う予定である。

(3) 時間をかけた仮テーマづくりと受講生の意思を尊重した班編成

前回の研究の提言から、受講生が自主的に学習・研究するための班編成については、できる範囲で班を多く設定し、受講生が班ごとの学習・研究テーマを選択できる機会を増やすことを目的とした。また、班活動を統括する班長と副班長を班編成の時点で選出することとした。

今回の班編成では、受講生が班を選択し編成する機会を2回設定した。まず、最初のグループワークによる演習や学習・研究テーマ設定時の班編成においては、受講生本人の意思を配慮せずにグループ分けを行った。次に、班毎の仮テーマが設定された時点で、受講生自らが学習・研究したい仮テーマを有する班を選び所属するようにした。

そのプロセスでは、仮研究テーマが自分の活動にふさわしくないと考えた受講生が自らのテーマで班編成をすることや自ら研究したいテーマの班に変わることの必要性を強調した。しかし、現状は、仮テーマ班のみが正式な班として編成され、すべての班員が仮班のままで正式な班に属した。

しかし、今回も「別の班へ移動することの心地悪さ。」や「学習・研究したい仮テーマがない。」などの理由で、「不本意ながら現班にとどまった。」ことや「専攻科の受講をやめた。」という課題を残した。

今後は、平均年齢が70歳で自治会など地域社会への貢献

活動が豊かな創年の意識行動に即した班編成と仮テーマ設定のあり方を研究することが課題である。

(4) 班別活動における呼吸するプログラムの導入

今回は、班別学習プログラムの編成は全班員が納得して決定するという合意法で実施した。特に、班員が興味・関心を持った学習内容を追求する過程で学習内容・方法を変えるなど深化し続けることができる呼吸するプログラムとした。また、班長に対して、班活動を効果的に行うため、全班員が自らの長所を生かせる役割を担当し責任を持って遂行できるよう配慮するよう要請した。

これらの班活動の内容や方法については、今回の調査結果からみると、受講生や班長からは好評であった。

この呼吸するプログラムは、常に学習内容が変容するグループ活動のプログラムとしては効果的といえよう。また、班員の役割分担についても、グループへの帰属意識や活動への参画意識を高めるためにも有効といえる。

(5) 地域活動への参画要因

今回は、学習プログラムに自主グループづくりのための学習内容を盛り込まなかった。そして、班員が自ら自主活動を目指すことを期待している。そのためには、前回の研究の提言を生かすこととした。例えば、班員が積極的に班活動に参画し班役員の負担を軽減することや的確な役割分担と責任ある活動を行うことができるようにしたことである。

今後は、専攻科終了後に各班の自主的なグループ活動が期待できる学習内容・方法をはじめ、事後活動を支援する方策などの研究をすすめることが課題である

おわりに

本研究は、松戸市の公民館の館長と職員の方々やまつど

生涯学習大学専攻科受講生の皆様のご協力をいただいたからすすめられたのである。特に、第1班の堀口嘉信班長、第2班の澤田佑一班長、第3班の伊藤博班長には、ご多忙中にもかかわらず、快くご尽力賜ったことについて改めて感謝する次第である。

にもかかわらず、本研究は未完の状態であり、本レポートも未完成である。その理由は、本稿をまとめている現時点(平成18年11月末)で、専攻科が終了していないからである。第3学期は、現在までの研究の成果を生かしながら、自主グループ結成への機運の醸成に取り組んでいきたい。

今回の研究は、前回の提言を踏まえて学習プログラムを編成し運営と評価を行ってきた。そして、受講生や班長を対象とした調査の分析などの結果、創年の社会参画を前提とした学習機会の提供事業の方向性が見えてきたと思われる。

今後は、多くの社会参画型の学習機会の提供事業の調査・研究を行い、学習・研究プログラムのあり方や自主グループ結成に関する課題や具体的な促進策についての研究を深めていきたい。

参考文献

- ・清水英男著「創年の社会参画を前提とした学習機会の提供事業に関する一考察」(聖徳大学生涯学習研究所紀要第5号pp. 9-41, 平成18年3月31日)
- ・「生涯学習の成果を幅広く生かす」(生涯学習審議会答申, 平成11年6月)
- ・「平成14年度社会教育調査報告書」(文部科学省, 平成15年1月)
- ・矢切公民館・青少年会館「平成17年度公民館事業報告書」(松戸市教育委員会生涯学習本部公民館, 平成18年3月)
- ・E. ハミルトン著田中雅文・笹井廣益・廣瀬隆人訳「成人教育は社会を変える」(玉川大学出版部, 2003年1月)
- ・鈴木真理著「ボランティア活動と集団」(学文社, 2004年2月)
- ・マルカム・ノールズ著堀薫夫・三輪健二監訳「成人教育の現代的実践」(鳳書房, 2002年2月)

(2007年1月9日受理)

別添資料1 「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査」の調査票兼集計表

（「注」本調査の集計「回答数」の上段は、平成16年10月27日に実施した回答者24名に対する数値である。但し、問6、問6-1、問6-2は、平成17年2月9日に実施した回答者数19名の第2回調査の数値である。）

この調査は、成人の皆様の地域活動を促進する学習活動のあり方を明らかにすることを目的としています。また、調査結果は、数値で表しますので、あなたのプライバシーを侵害することはありません。

どうぞ、この調査にご回答くださいますよう、宜しくお願いいたします。

平成18年11月8日
聖徳大学教授 清水 英男

問1 あなたが、この専攻科の受講者募集を知ったのは、なにからですか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

選 択 肢	回答数(%)
ア 市の広報誌から	16(66.7) 15(93.7)
イ 公民館の広報紙から	3(12.5) 0(0.0)
ウ 仲間から	1(4.2) 1(6.3)
エ 公民館の職員から	2(8.3) 0(0.0)
オ その他()	2(8.3) 0(0.0)

問2 あなたがこの専攻科を受講した動機について、以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア 自分の意思で参加した	21(87.5) 16(100.0)
イ 仲間に誘われて参加した	1(4.2) 0(0.0)
ウ 公民館の職員に誘われて参加した	2(8.3) 0(0.0)
エ その他()	0(0.0) 0(0.0)

問3 あなたは、地域活動(グループ活動、ボランティア活動など)を行っていますか。

ア 現在行っている	10(41.7) 10(62.4)
イ 過去に行ったことがある	1(4.2) 2(12.5)
ウ 行ったことがない	11(45.8) 3(18.8)
エ その他()	2(8.3) 1(6.3)

問3-1 問3でアとイと答えた方にお聞きします。どのような地域活動を行っているのですか、また、行ったのですか。次の()の中に記入して下さい。いくつでも結構です。(問4へ)

- ・社会福祉に関する活動(3名)
- ・自治会活動(3名)
- ・観光ボランティアガイド(2名)
- ・環境保全に関する活動(2名)
- ・学習ボランティア(1名)
- ・青少年の安全確保に関する活動(1名)

問3-2 問3でウと答えた方にお聞きします。地域活動を行わなかった理由はなんですか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア 忙しくて時間がなかったから(問4へ)	3(27.3) 1(6.3)
イ 興味がなかったから	2(18.2) 0(0.0)
ウ 地域活動の内容がわからなかったから	4(36.3) 2(12.5)
エ 参加したいグループがなかったから	1(9.1) 0(0.0)
オ お金にならないから	0(0.0) 0(0.0)
カ その他()	1(9.1) 0(0.0)

注) 平成17年の調査は、問3でウと回答した11名を100%とした。また、平成18年の調査は、回答者3名を100.0%とした。

問4 すべての方にお聞きします。今後、地域活動に参画したいと思いますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア ぜひ参画したい	7(29.2) 6(37.5)
イ 機会があれば参画したい	15(62.4) 9(56.3)
ウ なんともいえない	1(4.2) 1(6.3)
エ 参画したくない	0(0.0) 0(0.0)
オ その他()	1(4.2) 0(0.0)

問4-1 問4でアとイと答えた方にお聞きします。どのような地域活動を行いたいと思いますか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 環境保全に関する活動	7(29.2) 7(43.6)
イ 社会福祉に関する活動	7(20.2) 5(31.3)
ウ 体育・スポーツ・文化に関する活動	8(33.3) 5(31.3)

エ 公共施設(公民館や図書館, 青少年センターなどのボランティアに関する活動)	2 (8.4) 6 (37.5)
オ 募金, チャリティーバザーに関する活動	0 (0.0) 0 (0.0)
カ 青少年の健全育成に関する活動	3 (12.5) 3 (18.8)
キ 自主防災活動や災害救護に関する活動	2 (8.4) 2 (12.5)
ク 国際理解・国際交流に関する活動	2 (8.4) 1 (6.3)
ケ 保険・医療・衛生に関する活動	0 (0.0) 1 (6.3)
コ 交通安全に関する活動	3 (12.5) 2 (12.5)
サ 市民の学習活動の支援に関する活動	7 (20.2) 1 (6.3)
シ その他()	0 (0.0) 0 (0.0)

注) 平成17年の調査は, 回答者24名を100%とした。また, 平成18年の調査は, 回答者16名を100.0%とした。

問5 すべての方にお聞きます。あなたは, なぜ, 現在専攻科で学習しているのですか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア 地域社会に役立つ活動を行うため	11 (45.7) 3 (18.8)
イ 趣味を充実するため	2 (8.4) 3 (18.8)
ウ 教養を高めるため	3 (12.5) 4 (25.0)
エ 自分の可能性を探るため	6 (25.0) 6 (37.5)
オ その他()	2 (8.4) 0 (0.0)

問6 すべての方にお聞きます。現在参画されている専攻科の学習は, 役に立っていますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア 非常に役立っている	5 (26.3) 4 (25.0)
イ ある程度役立っている	13 (68.4) 11 (68.7)
ウ どちらともいえない	0 (0.0) 0 (0.0)
エ あまり役立っていない	1 (5.3) 0 (0.0)
オ まったく役立っていない	0 (0.0) 0 (0.0)
カ その他()	0 (0.0) 1 (6.3)

注) 平成17年の調査は, 第2回調査(2月9日実施)であり, 回答者19名を100%としている。

問6-1 問6でア、イと回答された方にお聞きます。役に立っている学習とはどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 生涯学習の理論	6 (37.5)
イ 集団での意思決定(グループワーク)の技法	8 (44.4) 9 (56.3)
ウ グループ活動の理論とリーダーシップ	0 (0.0) 5 (31.3)
エ 現地訪問・体験型による学習の技法	6 (33.3) 2 (12.5)
オ 創造性訓練(トレーニング)の技法	1 (5.6) 1 (6.3)
カ 班による課題発見・解決型の学習	8 (44.4) 6 (37.5)
キ その他()	1 (5.6) 0 (0.0)

注) 平成17年の調査は、第2回調査(2月9日実施)であり、回答者18名を100.0%としている。

問6-2 問6でエ、オと回答された方にお聞きます。役に立っていない学習とはどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 生涯学習の理論	
イ 集団での意思決定(グループワーク)の技法	1 (100.0) 0 (0.0)
ウ グループ活動の理論とリーダーシップ	0 (0.0) 0 (0.0)
エ 現地訪問・体験型による学習の技法	0 (0.0) 0 (0.0)
オ 創造性訓練(トレーニング)の技法	0 (0.0) 0 (0.0)
カ 班による課題発見・解決型の学習	0 (0.0) 0 (0.0)
キ その他()	0 (0.0) 0 (0.0)

注) 平成17年の調査は、第2回調査(2月9日実施)であり、回答者1名を100.0%としている。

問7 すべての方にお聞きます。現在専攻科の学習は、グループにより学習課題を設定し、その課題を達成するための企画や運営、評価のあり方をグループによって成し遂げる方法をとっています。この方法の問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

【ア 方法全体に対する意見】

- ・大変よい(1名)・研究テーマ設定までの過程が問題(1名)・まとめの方針が見つからない(1名)・話し合いが少ない(1名)・はじめに多く発言した班員がリーダーになり、そのリーダーに引っ張られた(1名)

【イ グループ編成に関する意見】

- ・女性の受講生が少ない(1名)・研究テーマについての意識・知識の差が大きすぎる(1名)・班になじまずやめた受講生がいたようだ、4から5班編成がよいのでは(1名)

【ウ 体験活動等内容に関する意見】

- ・あまりにも時間が少ない(1名) ・グループで行動するので自分の考えが制約される(1名) ・班活動の時間が確保できない班員は加わらないほうがよい(1名)

【エ その他】

- ・意見なし

問8 すべての方にお聞きします。現在の専攻科の学習で、問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

- ・講師の話がわかりやすい(1名) ・講義を聴くつもりで受講したので班活動で戸惑ったが、大変勉強になった(1名) ・班活動で全員が集まることが困難であったのは時間が少ないからと思われるので2年間を希望する(3名) ・班を増やしてより研究テーマを選択できるようにする(1名) ・自主的な班活動を効果的に行うためにリーダーの訓練を行う必要がある(1名) ・全受講生が知り合いになるために全員の自己紹介を行うこと(1名)

問9 最後に、すべての方にお聞きします。あなたの属性等について、以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

1)性別

ア	男性	19 (79.2) 11 (68.7)
イ	女性	5 (20.8) 5 (31.3)

2)年齢

ア	55歳未満	0 (0.0)
イ	55歳以上60歳未満	0 (0.0)
ウ	60歳以上65歳未満	4 (16.7) 3 (18.8)
エ	65歳以上70歳未満	12 (50.0)
オ	70歳以上	8 (33.3) 5 (31.3)

3)職業

ア	職業についている(フルタイム)	0 (0.0) 1 (6.3)
イ	職業についている(パートタイム)	2 (8.4) 1 (6.3)
ウ	職業についていない	22 (91.7) 14 (87.4)
エ	その他()	0 (0.0) 0 (0.0)

4)班

ア	1班	8 (33.3) 6 (37.5)
イ	2班	8 (33.3) 5 (31.3)
ウ	3班	8 (33.3) 4 (25.0)

ご協力有難うございました。

別添資料2 「平成18年度まつど生涯学習大学専攻科『松戸のよさを楽しむ“まち”づくりの研究』班長の感想・提言調査」の
調査票兼集計表

この調査は、各班の班長さんが、いままでの専攻科の学習内容と班活動との感想とご提言をいただくことを目的としています。

調査結果は、データとして処理しますので、班長さんのプライバシーを侵害することはありません。どうぞ、ご協力ください。よろしくお願いいたします。

平成18年10月30日

聖徳大学教授 清水 英男

問1 専攻科で実施された全体会の学習は、役に立っていますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号一つに○をつけてください。

選 択 肢	回答数(%)
ア 非常に役立っている。	2 (66.7)
イ ある程度役立っている	1 (33.3)
ウ どちらともいえない	0 (0.0)
エ あまり役立っていない。	0 (0.0)
オ まったく役立っていない	0 (0.0)
カ その他()	0 (0.0)

問1-1 問1でア、イと回答された方にお聞きます。役に立った学習とはどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 生涯学習の理論	3 (100.0)
イ 集団による意思決定(グループワーク)の技法	2 (66.7)
ウ グループ活動の理論とリーダーシップ	3 (100.0)
エ 現地訪問・体験型による学習の技法	1 (33.3)
オ 創造性訓練(トレーニング)の技法	1 (33.3)
カ 課題発見・解決型の実際の学習(演習)	1 (33.3)
キ その他()	1 (33.3)

問1-2 問1でエ、オと回答された方にお聞きます。役に立たなかった学習とはどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 生涯学習の理論	0 (0.0)
イ 集団による意思決定(グループワーク)の技法	0 (0.0)
ウ グループ活動の理論とリーダーシップ	0 (0.0)
エ 現地訪問・体験型による学習の技法	0 (0.0)
オ 創造性訓練(トレーニング)の技法	0 (0.0)
カ 課題発見・解決型の実際の学習(演習)	0 (0.0)
キ その他()	0 (0.0)

問2 初期の班別学習(平成17年5月31日から7月26日の9回)における班の状況や班員の意識、役員としてのあなたの立場などについて、下記の箇所に記入ください。

ア 当時の班員グループとして全体の人間関係は、どのような状況でしたか。

- ・発言者が限られている。
- ・消極的で、問題の解決に時間がかかる。
- ・協調・協力があがり、かつ、意欲が感じられ取り組みやすかった。
- ・お互いに知らないで遠慮がちであった。

イ 当時の班は、テーマ設定など目的達成への取り組みはどのような状況でしたか。

- ・全員がイメージできないような仮テーマもあった。
- ・テーマもすぐ決まり、全員がすぐに研究に取り組めた。また、目的達成も早く、調査対象も拡大した。

ウ 当時の班活動で、よかったと思われたことはどのようなことでしたか。

- ・顔写真入名簿を作成し配布したことにより名前を覚えるのが早まった。
- ・開講後まもなく食事会を実施したことによって、各自のコミュニケーションがはかられた。

エ 当時の班活動で、問題と思われたことはどのようなことでしたか。

- ・参加しない班員がいたことや自分の提案した意見以外は賛同できないという班員がいた。
- ・現地調査のスケジュール調整が大変だった。
- ・研究テーマを提案すると、既に別の人が調べているなど否定的な意見をいう班員がいた。

オ 当時、班長として、力を入れたことはどのようなことでしたか。

- ・全員の発言を促すこと。
- ・コミュニケーションづくり。
- ・班員の意見を聞き全体の研究テーマとしてまとめること。

カ 当時、班長としての感想(よかったこと、問題点など)を聞かせてください。

- ・班員が自発的に役員を担ってくれたこと。
- ・早い時期の食事会・打ち合わせ会でお互いの意思が通じ合えたこと。
- ・意見もばらばら、行動も勝手にまとまりがなかったこと。

問3 中期の班別学習(平成18年9月6日から10月25日の5回)における班の状況や班員の意識、役員としてのあなたの立場などについて、下記の箇所に記入ください。

ア 当時の班員グループとして全体の人間関係はどのような状況でしたか。

- ・途中でやめた班員もいたが、回を重ねるごとに親密かつ積極的に発言するなど人間関係や研究への取り組みがよくなってきた。
- ・人間関係が大変よく協力的になってきた。
- ・昼食会などを行ってお互いの性格もわかってきて、課題もまとまるようになってきた。

イ 当時の班は、テーマ設定など目的達成への取り組みはどのような状況でしたか。

- ・研究テーマ修正などについて積極的な意見交換が行われた。その結果研究テーマも定まり、後半はまとめのイメージもでてきた。
- ・研究テーマの設定や目的達成までの取り組みは大変スムーズにすすめられた。
- ・研究テーマが決まってからは各自訪問先の事前調査やアポ取りなどを協力して行った。また、人間関係も徐々によくなった。

ウ 当時の班活動で、よかったと思われたことはどのようなことでしたか。

- ・現地調査後の食事会でのコミュニケーション
- ・訪問先や会計など担当を決めて実施したこと
- ・経費を班員が共同で負担したこと

エ 当時の班活動で、問題と思われたことはどのようなことでしたか。

- ・屋外での現地調査が天候に左右される恐れがあったこと
- ・集団行動ができにくい班員がいたこと
- ・問題となるようなことはほとんどなかった

オ 当時、班長として、力を入れたことはどのようなことでしたか。

- ・班員が当番制で役割を果たすようにしたこと
- ・班員が楽しんで現地調査を行うようにしたこと
- ・気軽に意見交換ができるようなコミュニケーションづくり

カ 当時、班長としての感想(よかったこと、問題点など)を聞かせてください。

- ・現地調査の結果の原稿を作成することにより、歴史観がわかったので、話が通じやすくなったこと
- ・消極的な班員が積極的になってきたこと
- ・女性が意見を述べるようになったこと

問4 後期の班別学習(平成18年11月26日から以降現在まで)における班の状況や班員の意識、役員としてのあなたの立場などについて、下記の箇所に記入ください。

ア 班員グループとして全体の人間関係はどのような状況ですか。

- ・気配りの必要もなく好ましい人間関係ができた
- ・班全体がまとまってきた

イ 班の目的達成への取り組みはどのような状況ですか。

- ・スムーズにすすみ調査範囲の拡大が図られた
- ・全員が責任をもって現地調査先のレポートをつくるようになった

ウ 班活動で、よかったと思われていることはどのようなことですか。

- ・コミュニケーションがうまく行われたこと
- ・目的達成のための意見が積極的にでるようになったこと

エ 班活動で、問題と思われていることはどのようなことですか。

- ・特になし。
- ・特定の班員にレポートをまかせるような意見がでたこと。しかし、それでは全員参画の意味がないと否決されたこと。

オ 班長として、力を入れていることはどのようなことですか。

- ・研究テーマに対する知識が少ない班員にも参画意識を持たせ報告書を作成するように働きかけていること。
- ・レポートのまとめ方について、班員の意見の調整を行っていること。

カ 班長としての現在の心境(よかったこと、問題点など)を聞かせてください。

- ・研究のレポートが大変よくまとまりそうなので安心感ができたこと。
- ・「難しい」の一言につける、好ましい人間関係づくりの体験がリーダーとして勉強になった。

問5 講座終了後、あなたの班の方向についてお聞かせください。なお、回答された項目の下の()の中に、主な理由を記入ください。

ア 自主グループとして活動することが大いに期待できる。

(0名)

イ 自主グループとして活動することが期待できる。

(1名)理由：未記入

ウ 自主グループとして活動できるかどうかわからない。

(1名)理由：班員は受身の講義だけで自主的に調査研究をするとは思っていなかったように感じられる。但し、最終結果がまだでていないので方向はわからない。

エ 自主グループとして活動することが期待できない。

(0名)

オ 自主グループとして活動することができない。

(0名)

カ その他()

(0名)

ご協力誠にありがとうございました。心から感謝申し上げます。